

図 書 紹 介

Keith Buchanan. *The Southeast Asian World, an Introductory Essay*. London: G. Bell and Sons, Ltd., 1967. 176 pp.

イギリスは伝統的に地理学、とくに地誌に強い。本書はこの伝統をふまえた東南アジアの地理学的概説である。東南アジアをいかなる側面から研究するにせよ、地理にかんする常識をもっておくことは大切である。この意味で本書はとくに注目に値する。

ブキャナン教授は1953年いらいニュージーランドの Victoria University of Wellington の地理学教授である。それまで数年にわたりナイジェリアの University of Natal, University College, Ibadan で教鞭をとるとともにアフリカの現地調査に従事、ニュージーランドに移ってから東南アジアの調査を行なったのであり、低開発国地理についての現在指導的な研究者のひとりである。

本書の章をおって内容をごく簡単に紹介する。第1章は東南アジアの特質であって、著者はこの地域を Under-developed というよりむしろ Pre-developed としてとらえたいという。第2章は東南アジア研究者がよく指摘する「統一における多様性 (diversity in unity)」を歴史的に把握する。第3章は自然的基礎であって、地質地形構造・気候・生態などを明らかにする。第4章は食糧農業、第5章は農民生活を取りあげる。転じて第6章では東南アジアとヨーロッパとの政治的経済的一体化を取りあげ、プランテーション農業はここで取り扱われる。第7章は人口問題で、とくに人口の分布と増加率が問題になる。第8章は戦後の独立にともなう新興国の形成全般が、ついで第9章では各国別の国家形成が論ぜられる。最後の第10章は将来の展望であって、著者のきわめて楽観的な見とおしが結論となる。

著者が本書に An Introductory Essay とサブタイトルをつけているように、いずれは Fisher 教授の東南アジア地誌のような大冊を書きあげるつもりかも知れない。Fisher 教授の大著はもちろん現在の東南アジア地誌として最高のものであるが、その大冊のゆえになかなか通読しがたい。それにくら

べると、本書はきわめてハンディである。その意味で入門書として広く推薦したい。(本岡 武)

Michael Moerman. *Agricultural Change and Peasant Choice in a Thai Village*. Berkeley and Los Angeles: University of California Press, 1968. 227 + vii pp.

University of California, Los Angeles の文化人類学科に現在勤務する著者 Moerman 博士が、1959-61年、北タイの Chiengrai 県 Ban Ping に定着調査をし、さらに1965年補足調査を行なったが、その成果が本書である。

本書の題目がそのまま示すように、この Ban Ping において農業、とくに水田作農業がいかに変革しつつあるか、また農民が変革にさいしいかなる選択を行なったかを主題とする。

本書の構成を紹介しよう。第1部背景として、第1章では Chiengrai 郡と Ban Ping の概要とそこに住む Lue 人の過去。第2章ではその問題としての農業と農民のありかたを把握する。第2部は農業を第3章のプラウ農業と第4章のトラクター農業とに分け、その技術と村落外部関係とを詳論する。第3部は資源としての土地と労働とを取りあげ、第5章は土地の入手、第6章は労働移動とを、同じく技術と村落外部関係の2点から分析する。第7章は農業方式の選択、第8章は農業方式の変革であり、この両章に著者の重点が注がれている。なお付録として、モチ米についてのノート、量的データの入手過程と比較が掲げられている。

本書の特徴として、つぎの3点が指摘できる。第1はプラウ(スキ)耕の農業方式からトラクター耕へのそれが、このようなタイの北端部で生じている事実である。まったく画期的なことであるが、本書においてはじめてこれが本格的に分析されたのである。きわめて原始的伝統的農業へトラクターが持ちこまれた理由こそ、低開発国農業開発の立場からしても、重大な注意が払われなければならない。第2は、この農業方式変革を取り入れる農民の選択であ